
エブロード王国物語 - 異界の魔獣使い -

hiro33

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エブラード王国物語 - 異界の魔獣使い -

【Nコード】

N1933Y

【作者名】

hiro33

【あらすじ】

魔道船の事故に巻き込まれ大河にながされ、契約していた精霊とは契約廃棄となり、気づけば猫型らしくない魔獣と契約することになり、エブラード王国を中心に物語は進みます。

異界の魔獣使い（前書き）

はじめまして初投稿です。最後まで続けるようにがんばります。投稿できる時が不定期になると思います。感想いただければ嬉しいです。

異界の魔獣使い

プロローグ

その日、王都エブリード付近にて前代未聞の事故が発生した。

魔道船 - 方舟ヴァンガード - 最大収容人数1500人
事故当時の乗員乗客は1300人

巨大な飛行船ヴァンガードは
王都を出発後、乗員乗客を巻き込み大河へと墜落する。

死者行方不明者1246人生存者54人と言われ、今世紀最大の魔道船事故として
後世の歴史書に記されることとなる。

乗員乗客にとって不運だったのは、ヴァンガードが大河ではなく大地に墜落

していればまだ生存者が多かったはずであった。

本来ならば墜落しても生存できるように、魔道師が施した魔方陣により乗員乗客の

命が助かったはずなのだが、墜落した場所が悪すぎたのだ。

大河ムーリルヴァの川のと真ん中へと墜落し、

乗員乗客1300人を乗せたヴァンガードは大河に沈んだのだ。

泳げる者がいても大河に住む水棲の妖獣、魔獣の餌となり、運の良い乗員乗客で泳げる者、

ごくわずかな魔道の使い手のみが生存することが出来たと言う、史

上最悪な大規模事故であった。

岸からの救助を行おうにも、大河にいる数多の水棲の妖獣、魔獣により近づくことも出来ず

大河は乗員乗客の阿鼻叫喚と水棲の妖獣、魔獣の歓喜の咆哮が続き、大河が犠牲者の血で赤く染まったと後世に伝えられた。

魔道船 - 方舟ヴァンガード - 空を飛ぶ飛行船の先駆けであり、先駆者としてつけられた。

ヴァンガードの名は、皮肉にも後世に大規模飛行船事故における先駆者として名を残してしまったのである。

異界の魔獣使い 1

1

魔道船・方舟ヴァンガード・の事故より一月が経った。

王都エブラードより公式発表として、魔道船・方舟ヴァンガード・の乗客に

五大英雄の一人、傭兵王ルクサス公の孫の死亡を公式に伝えられ喪に服することとなる。

五大英雄とは

傭兵王ルクサス公

騎士王ヴァルチス公

精霊巫女姫ルチア

魔道王ガーリア公

盗賊王ムルサ公

の5人を指す。

そして彼らと共に魔族の脅威より世界を救った救世主として

王都エブラードの王にして、異界より流れてきたユウキ・スガワラを聖王として

現在の王都エブラートはまとめられている。

話は一月前に遡る。

大河ムーリルヴァに起きた、魔道船・方舟ヴァンガード・の事故より数時間後である。

「なんとか岸につかねば」

大河ムーリルヴァに魔道船より投げ出され数時間、今だ大河から上がれず流されるまま

船の残骸と思われる木片につかまりなんとか生存してはいるのだが、その命もまもなく尽きてしまうのではないかと、思わずにはいられない。

投げ出された直後は酷い有様だった。

泳げる者は、片っ端から水中へ引きずりこまれ溺死させられ死んでゆく。魔道船が大河に沈んだ

ことから、大多数の乗船乗客が今だ魔道船の中にいるはずだろう、そしてその者達も

すべて脱出出来ぬまま溺死していったことだろう。

「悪運が良いのか悪いのか・・・ありえない世界だ」

とりあえず五体満足には生きている。怪我もなく、今の所妖獣、魔

獣に気づかれてはいない。

これがもし怪我でもしていれば血の臭いから妖獣、魔獣に襲われていたことは間違いないはずだ。

自分が助かった理由は、投げ出された直後に余り動かなかったことではないかと考える。

どれだけ流されこうしているのかもわからず、岸にたどり着こうにも川幅が広すぎるのだ。

流れは緩やかで、周囲に散乱する漂流物を見れば生存している者は自分だけ。

流れに逆らわず、なんとか岸へと近づこうとしているのだが、なかなか難しい。

頼みの契約精霊を頼ろうにも、精霊との証である紋様が肌より消えている。

考えられることは、精霊が契約を廃棄したということ。

「まさか死に戻りか」

ありえなくはない。大河に投げ出されたショックかはわからないが、一時的に心肺停止でもした可能性がある。

契約精霊とは、自分の能力になってもらうべく精霊と契約することだ。

強制的に契約することと、自然に契約出来る２種類のやり方があるのだが、自分の場合は前者だった。

自分が生まれた時に、家族が強制的に精霊と契約させたのだ。

自分としては物心つく頃からいた精霊だったが、契約が廃棄された状態だと言うことは自分が一時的にも死んだからとしか思いつかな

い。

精霊との契約廃棄には契約した者が死亡した場合と、契約した精霊から愛想つかされるかなのだが、自分の場合は一時的でも心肺停止したからとしか思いつかない。

精霊は契約者が死ぬと契約解除されてしまうため、「死に戻り」、「黄泉返り」した者は契約した精霊との契約が解除されてしまい、今まで使役していた精霊が使えなくなってしまうのだ。

「死に戻り」、「黄泉返り」はそれほど珍しいことではないのだが、冒険者や傭兵、騎士がそうなってしまうと今までのように活動することが

難しくなるため、新たな精霊と契約しなおさなければならなくなってしまうのである。

「なるようにしかならないかもだが、諦めるのも癪だ。こんな面白そうな世界だし」

死ぬかもしれないと、諦めるのは簡単だ。

だが、こうして生きている以上命を捨てる気もないのも確かだ。

そろそろ掴まっているこの木片よりも、安定した大きさの浮遊物はないかと周囲を見渡せば、樽が浮いているのが見える。

掴まるのは不安があるが、確実に沈まないものとなるとそれくらいしか見当たらないので、移動する。

樽は自分がなんとか抱え込める大きさだった。

これを浮き輪にすこしずつ上がれそうな岸を探して移動する。

どれほどの距離を、流されているのか分からないがなんとか移動することは出来そうだ。

『・・・フギヤ・・・』

掴んでいる樽の中から何かの声が聞こえた。

「????」

空樽ではなかったのだろうか？

『だから・・・で・・・』

声は動物のようなもの？と言葉のようなもの？が聞こえるのは気のせいだろうか？

「樽の中に誰かいますか？」

コンコンと樽を叩いてみる。

何も聞こえず、自分の気のせいらしい。

「長時間の漂流での幻覚か・・・」

低体温状態になりつつあるのだろうか、これは早急に岸めざして上陸せねばと考える。

「幻覚酷くなる前に岸目指すか。ここまでくればこれに掴まる必要なさそうだな」

樽からはなれて泳いで岸を目指すことにした。ここまでくれば妖獣、魔獣の気配が薄い。

『まっ！待て・・・』

どうやら空樽には誰かいたらしい。

「こんにちわ。誰かしりませんが、人間じゃなさそうです」

『お願い岸へ一緒に・・・』

樽の中に何かいるか分からないが、同じ魔道船に乗っていたよしみで樽ごと岸まで泳ぐことに変更する。

「とりあえず岸まで、なんとか泳ぎつくようにするので、無事ついたら樽から出してあげます。ただし

襲ってこないで下さい。人族じゃなさそうだし」

『分かった・・・』

何が樽の中にあるのか気になるところです。

異界の魔獣使い1（後書き）

続いて投稿です。 よろしくおねがいます。

異界の魔獣使い2

2

たどり着いた岸边は、漂流物がたどり着きやすい形状になっているのか、そこかしこ魔道船の残骸や

荷物とおぼしきも物、余り見たくはないが人だった物の一部が流れている。

「さすがにきつい・・・」

なんとか樽を抱え、やや開けた場所へ移動する。

あとで流れ着いた荷物を確認してみようと思うが、濡れそぼった服が気持ち悪い。

「樽開ける道具探すので、待っててください」

自分の持ち物の確認が先だ。

腰に挿したはずの精霊憑きの剣は、やはりない。

腰に付けた冒険者用の道具袋2つは無事だった。

これは冒険者なら、誰でも所持できる小袋で重さを感じずに持ち運び可能なため旅の必需品だ。

これが流されなくて良かったと思う。

小袋から樽を開けるに使えるそうな小剣を取り出す。

「とりあえず開けます剣先に気をつけて」

ぐりぐりと少しずつ樽の縁に小剣を差込なんとか蓋を開ける。

『やった！出られたわ感謝する人間』

飛び出して来たのは真っ白な子猫？体全体に模様が入って・・・

「・・・驚いた白雪彪はくせつひょうの幼生体ですか」

まんま子猫にしか見えなくはないのだが、知るものが見れば白雪彪の幼生体だと分かるはずだ。

雪山に生息し、その毛皮は王侯貴族に好まれるSSランクの魔獣。

知能が高く狩るのはたやすくはないため、滅多なことでは狩ることが不可能な魔獣である。

『わかるの？』

剣呑な眼差しで見ないでほしい。

「分かる人は分かるはずですね。そのままじゃ何なので、首輪外していいですか？」

人にしか外せない仕様の隷属の首輪が、邪魔だろうと思う。

『えーこれ結構気に入った首輪なんだけどキラキラして』

見た目は確かに綺麗な宝飾をほどこしているのだが、隷従の首輪で追尾機能付のはずだ。

「付けたいのはかまいませんが、それ追尾機能付で隷属の首輪ですよ。付けた人間が貴方が生きていると分かれば追っ手がくるはずですよ」

小袋から自分の代えの服を取り出しつつ、濡れた服を脱ぎながらそう教える。

『ええっ！外して頂戴！人間！』

知らなかったのか、外せ外せとうるさい。

「着替えさせてください。まああの事故の混乱で、直ぐは大丈夫なはずですよ」

なにせあれだけ規模の重大事故だ。どれだけ下流に流されたのか分からないが、墜落した周囲はすごいことになっており、それどころではないはずだ。

「白雪彪さん貴方の名前は？私は人間と言う名ではなく、スズ・いえセルファです。人族の男になります」

「名前なんてないわ。気づいたら人間のところにいて、あの船でどこか連れていかれるとこで・・・」

なんとか自分に起きたことを説明してくれた。
ハンターにでも生後まもなく捕まったのだろう。

「そうでしたか。では仮の名前を付けてもいいですか？名があるほうが呼びやすいですね」

なんとか濡れた服をすべて脱ぎ着替えの服を着込む。

やはり精霊契約の証は体から消えていると思いながら。

「・・・出して！・・・」

白雪彪の入っていた樽からまた声がする。

どうやらまだ何か入ったままだったらしい。

「まだ何かいるようですね・・・」

「忘れてた・・・」

白雪彪は自分が入っていた樽に顔を突っ込んで、何かを銜える。

樽には何がいるんだと、セルファがみれば、小人族3名と何か分からないコブシ大の卵が1つあった。

異界の魔獣使い2（後書き）

連続投稿です。

異界の魔獣使い3

3

「野営の準備した方がよさそうです」

白雪彪が気になるが、詳しいことは野営準備を整えてからのほうが安全だろう。

「白雪彪さん詳しくは野営準備後と言うことで、この場所は完全に安全かわかりませんので少し移動します」

まあ逃げたきや勝手に逃げてくれてかまわないのだが、野営準備してからで遅くないだろう。

セルフアは野営準備の為に、小袋から結界石を4つ取り出す。

精霊契約が切れてしまい、精霊魔法が使えなくなってしまった不便さは多少あるのだが、

結界石さえあれば周辺にいる魔物を寄せ付けることはないだろう。

ただし、すでに結界の中にいる魔物に関してはその限りではないが野営準備に必要な広さの四方に石を置き。中心に魔よけの魔方陣を展開させると、大人が3人余裕で眠れる大きさのテントを取り出し設置する。

テントの幅を利用して紐を結び、濡れた衣類をそこにひっかけ濡れた衣類をそこで乾かすことにする。

魔方陣からそれほど離れていない場所に火の準備をすることにして、その辺に落ちていた枯木を集められるだけ集め、簡易竈を作るため

の石もいくつか探し出し準備する。

「こんなもんかな」

安全面が気になるところだが、とりあえずは休む必要があるだろう。

『セルフア感謝するわ。人間でも良いやつはいるのね』

隷属の首輪をはずしてもらって白雪彪は、毛づくろいしつつそう告げる。

「さてどうでしょう。それよりも、これからどうしますか？」

所持していた簡易食で簡単な食事をすませ、ぎこちない様子の小人族へ聞く。

樽の中にいた小人族は女の子2人と男の子1人だった。

お姉さんの感じがエル、やや恥ずかしがりな子がミル、男の子はカイと言う名で

白雪彪の世話をする為に船に乘せられたらしい。

彼らも無理矢理、住み慣れた森から連れ去られ人間に隷属を強いられたらしい。

「王都では隷属する者は、犯罪者以外は禁止されたはずですが、どこにも馬鹿はまだまだいるようです」

『セルフアさんありがとう』

『ありがとな』

『ありが・・・とうございます』

助けてもらった礼を言われるのは悪い気はしない。

小人族をこうして近くで見るのははじめてだが、なかなか小さく

愛玩用に隷属させなくなる

気持ちも分からなくはない。が、セルフア自身隷属することには反対だ。

人であり他種族であろうが、犯罪者でない限り隷属し、自由を奪う権利はないと思っているからだ。

『セルフア、名前頂戴。名無しはなんか嫌だし』

「そうですね。貴方は白雪彪ですし、安直ですがシラユキはどうでしょうか？」

異界語の言葉ですが、白い雪と言った意味ですが」

異界語、聖王と呼ばれるユウキ・スガワラの故郷の言葉だと教える。

『シラユキ・・・私はシラユキ！わかったわ』

「気に入ったようですねによりです。省略して呼ばせなければユキだけでも良いでしょう」

『セルフアさん助けて貰ってなんなのですが、お願いがあるのです』
小人族のエルがそう告げる。

「なんででしょうかエルさん？」

「だいたい何が言いたいか分かるような気はするが、セルフアは聞いた。

『森へ帰りたいのです。私たちが住むエザイラの森へ・・・連れて行ってくれませんか』

やはりと思う。元居た場所へ戻りたいと誰もが思うことだ。

「・・・残念ですが、今は無理です」

そう言われた小人族が泣き出すのは当然で、助かった喜びもつかの間、奈落へと落とされた気分だろう。

異界の魔獣使い3（後書き）

連続投稿です。よろしく願います。

異界の魔獣使い 4

4

『ちよつとセルフア、そんな言い方な・・・』

怒ったシラユキがガシガシと、セルフアの腕に噛み付いてくる。

シラユキに噛み付かれるのは痛い、生きた毛皮の手触りは格別なものだと思う。

「泣かないで、今はと言っただけです。痛いですよシラユキ！

こつちの理由も聞いてからにしてください」

こんなシラユキはかわいいなあと、のんきに思いつつも、現在の自分の状況を話すことにした。

「見て分かると思いますが、私は人族で本来なら精霊魔法を使用していました。精霊魔法は誰でも使えるようになるわけでないのはわかりますか？」

『わかる・・・私たち捕まえた人間は使えなかった。雇われた冒険者が使っていたのは見た』
ミルが泣くのをなんとか堪えつつ呟く。

「人族では、冒険者になるのはだいたい精霊魔法が使える者や魔獣使いだけです。私も冒険者ですが、コレを見てもらえますか？」
小袋から取り出したのは、冒険者ギルドのランクカードだ。

セルフア・??????

AGE:112

SEX:???
JOB:?????
HP:???
MP:?????
INT:8064
DEX:216
VIT:537
STR:142
AGI:467
LUK:723

称号:???

契約精霊:????

冒険者ギルドランク: ????

『・・・年齢112!って人族じゃ。他も人族じゃありえない!』
カードを覗き込んで見るカイがありえないと叫ぶ。

「ええ、カードがバグっています。本来ならこんな数値はありえないですが、

私のこの体の年齢は19です」

普通ならギルドカードがこのようなことになることはありえないのだ。

「今は無理と言った理由がコレです。困ったことに今の私では精霊魔法も使えません」

さてどうしたものかと思う。

カードを見た限り表示されている数値はめちゃくちゃだし、
自分のギルドランクさえ分からない状態になってしまっているのだ。

『死に戻り・・・ですか?』

エルがそう呟いた。

「知ってましたか。多分としか言えないのですが、こうなる前に私は複数の精霊と契約してました。着替えた時にすべて確認しましたが、

契約していた精霊の紋様はすべて消えています。今の私では、貴方たちの言うエライザの森へ辿り着くことは非常に難しい。なので今は出来ないと告げただけです」

依頼されてエライザの森まで向かうのはかまわないのだが、精霊無しでは無理としか言いようがないのだ。

エライザの森は最低でもBランクの魔獣が出没するし、個人で行くのは難しくどうしてもチームを組まないと無理なのである。

「可能なのは、ふたたび契約してくれる精霊を探してからとなります。それが何年かかるかわからないので直ぐは無理ですし、早く帰りたいと思うのであれば、私など無視してランクの高い他の冒険者に依頼するしかないですね」

「死に戻り」も困ったものだと思う。今までしてきたことがすべてパアになるのだから。

ただ「死に戻り」にも1つだけ幸運が付けられる。精霊契約を廃棄される代わりに、あることが戻るのだ。

それを今は、セルフアも話すつもりはない。

『ねえねえ・・・セルフア契約って他のとは出来ないの?』

シラユキがふと魔獣である自分の今を考えて思う。

自分はかなり珍しい魔獣と言うのをセルフアから聞き知った。

今の状態では、また誰かに連れ去られる可能性もあるんじゃないだろうか……

どこから連れ去られたのか、両親の居る場所さえ分からないし、これから何かを言うとも思いつかない。

「精霊以外でも出来ますよ。魔獣使いと言うのもありますし……契約ですか」

シラユキを見て思うこのままでは、シラユキも危険に晒されるだろう。その希少性さゆえにだ。

『はい……ならアタシ、シラユキは契約する！セルフアとなら契約！珍しい魔獣は誰もが欲しがるならセルフアがいい！』

狙った獲物を離すまいと、爛爛と目を輝かせたシラユキが言う。

魔獣らしくないのは、生後まもなく連れ去られ人間と過ごしてきたからだだろうか？

いや小人族の3人が、世話していたからだだろうか？こうも魔獣らしくない話し方をするのは

「シラユキ契約は一生ものですよ。魔獣としての自覚はないのですか」

本来、このように柵からボタモチ的な幸運などありえないのだ。

まだ幼生体だが、SSランクの魔獣だ。

これが成長しきった時の成体の姿を思うと、どれだけの人族が欲しがるだろうか。

SSランクの魔獣を所持する魔獣使いとなると、片手分もないだろう。

「契約すれば、死ぬまで私に使役されることになります。まだ幼生体である貴方に、その意味が分かると思わないのですが、かと言ってこのままでは貴方を連れて歩くのは危険だろうし・・・」

セルファは考えこんでもどうも出来ないことに、シラユキと契約するしかないとわかっていた。

『なあ兄ちゃん。こいつも契約できないか？』

話をずっと聞いていた小人族のカイが、樽からだした。謎の卵を転がしながら聞いてきた。

「カイくんそれは、非常食とかじゃなかったのですか？」

てつきり大きめ卵を、非常食として持ち込んでいたのかと思っていたのだが違ったようだ。

『違うよ。俺たちを捕まえた人族のおっさんがさ。こいつも世話しろって渡されたんだぞ。逃げるときに大河に沈んだら可哀相かと思っ
て一緒に連れてきたんだ』

かなり重くて苦労したらしいが、なんとか転がしてここまで運んだと言っのが卵の真相らしい。

『この子まだ卵だけど、私たちとは会話できた・・・』

ミルが卵をなでてあげている。

小人族が世話をしていたのは、卵に話しかけたり時折卵を動かしたりくらいだと言っ。

「これ何の卵なんですか？卵生の生物となると、孵化すれば出てくるのは鳥類か爬虫類か両性類？」

卵の殻の色はやや薄くブルーが入っており、水の属性の卵だろうと予想がつくくらいで、何の卵なのかもサッパリ分らない。

「孵化するとしても、いつか分らない上に、どのような状態にし

ておけばいいのか・・・」

何の卵かも、わからないのでは対処が難しいではないか。

『この子、自然の気を吸って育つ珍しい生物としか言われなかった。卵の殻が割れる時は孵化する時で、それまではどんなに高い場所から落としても絶対に割れないって』

エルたちは、この卵を人族のおっさんが実際に割ってみせる感じで硬い石畳とかに落としたりしたのを見たのだと言う。

孵化する時に最初に見た相手に懐くらしいので、余程のことがない限り危険はないらしいとのことだ。

「そうですか。孵化しなければ契約もなにもありませんので、これは孵化するまで様子みるしかないですね」

生きている卵を道具袋へと入れるわけにもいかないだろうし、セルファは卵入れでも作って運ぶかと考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933y/>

エブロード王国物語 - 異界の魔獣使い -

2011年11月4日02時08分発行